日本における第二波フェミニズムの展開と課題

——「遅れてきたフェミニスト」がリブから学ぶもの——

野　田　さやか

0. はじめに——問題設定

私たちは，フェミニズムの理論に触れることで，今まで抱えてきた言葉にならない悶々とした気持ちの正体を知ることができる。とりわけ第二波以降，フェミニズムが私的な関係，両性間関係の問題を構造的な問題として取り上げてきたことは言うまでもない。

とは言え，私たちが自分の抱える不安や抑圧の意味を知る，構造的な問題として理解する，ということと，それから脱却した生き方を実践するということには大きな開きがあることは否定できない。多様なライフスタイルが存在し且つそれが目に見える情報化社会にあって，されど自らの生き方を変えることのできないもどかしさを，あるいは己に染み付いた嗜好性の惨めさ[1]を，女たちは再び個人的な問題として抱え込もうとしているのではないか。

このような，フェミニズムの言説へのとまどいは，フェミニズムの理論化の成熟とともに提起されたわけではない。むしろ，フェミニズムが私的な領域へ，両性間関係へと踏み込んだウーマン・リブの時点から，このとまどいは自覚されていた。むしろ，そのとまどいを隠さず見せることを自らの主張を展開する上での戦略としていたと考えられる。

本論では，このようなとまどいを整理する上で，1970年代のウーマン・リブにおいて〈とり乱し〉を提示した田中美津の主張を取り上げたい。田中は，日本におけるウーマン・リブの誕生期において，リブ運動体の代表とされる「ぐるーぷ闘う女」の中心的存在である。彼女は，自らの社会批判と，その批判の中で浮かび上がる自身のあり方へのとまどいを〈とり乱し〉として言及し，自分にとってのリブの「リブらしさ」と位置づけてきた。彼女の主張を考察することによって，現在の女性たちがフェミニズム言説へよせるとまどいを整理できるように思う。

本論では，その〈とり乱し〉に，現在までのフェミニズムがどのように応えてきたのかを考察し，そのことを踏まえてリブの意味を捉えなおし，現在のフェミニズムがリブから学ぶことを探りたい。

1. 田中美津の〈とり乱し〉ウーマン・リブ論

1–1. 1970年代日本のリブの背景

第二波フェミニズム運動の起爆剤として，アメリカにおける第二波フェミニズム運動については中産階級の主婦層における抑圧感が可視化されたこと，および黒人解放運動を中心とする1960年代の公民権運動や学生運動の中で，運動内部の男性優越主義が問題視されたことが指摘されている［渡辺和子，1997：25］。日本における，ウーマン・リブ運動の背景にも，主婦層の不満と新左翼運動の存在があるとされる。しかし，アメリカにおいて起爆剤の中心となる主婦層は，比較的高学歴の専業主婦層であった。またそれらの女性たちは，運動の発生時期から組織的な活動を行い，公民権運動の中から女性自身の運動を求めて比較的小さな組織で活動を行ったより若い世代の運動家たちと，時期的にも同時期に活動を展開し，相互に影響を与え合った［江原由美子，1985：106］。

一方，日本におけるリブ運動の背景となる主婦層の不満は，リブ運動が大きく盛り上がる背景とはなりえたが，世代的に若い無名の女性たちが小グループでミニコミなどを通じて展開する運動と別の運動の源泉を生み出すには至らなかった。この点が，主婦層の不満が社会的影響力を持った組織的な活動を生み出したアメリカと日本における第二波フェミニズム運動の異なる点である［江原，1985：104–107］。

日本におけるウーマン・リブ運動の中心は，新左翼運動の内部での性差別再生産への批判や不満をきっかけとして，ふつふつと盛り上がってきた世代的にも若い無名の女性たちのつくる連合体が担った運動と言っ

てよいだろう。その後，1975年の国際婦人年をきっかけとして，より具体的な政治的目標を提案し，マスコミを利用して社会的な承認を得た運動を展開した活動も生まれた[2]が，1970年代前半のリブ運動とは運動の担い手も異なり，また双方のつながりも薄いとされる［江原，1985：108］。

1–2. リブにおける田中美津の位置づけ

江原由美子氏によれば，従来の婦人運動と区別されるべきリブ運動の特徴の一つは，「母」「女子労働者」「主婦」といった社会的に承認されてきた女性の役割イメージに依拠して主張を行うことを拒否したこと，および性的対象としての女性の立場，性や身体の問題を積極的に取り上げたことである［江原，1985：110，123］。

これら日本におけるウーマン・リブの特徴は，現在から1970年代を振り返って指摘できるリブの特徴である。したがって，その特徴が，今，リブを概観する中で運動における主流の主張や活動スタイルだと言いえたとしても，多数の小規模な運動体が基本的には独立した活動と主張を展開していたウーマン・リブ運動において，その運動のさなかに何が主流であったと認識されていたかを厳密に特定することは難しいように思う。少なくとも，ウーマン・リブをリアルタイムで経験していない私が，リブとは何であったのかを考えるとき，手がかりにするものは活字として残ったリブの形跡しかない。しかも，そのリブの形跡を辿るにしてもリブの主張は一様ではない。

今，ここで日本におけるウーマン・リブを把握する上で，且つその上で現在のフェミニズムへの一視点の提起を試みる上で，田中美津を取り上げようとする理由のひとつは，1970年代，および当時を振り返ったその後の彼女自身の言葉が活字化されている，という研究上の制約があることは否めない。それにも増して田中美津の主張を取り上げるべき積極的な理由は，少なくとも活字化された彼女の発言を辿る限りにおいては，リブにおいて試行錯誤する様々な主張の中で田中がどの立場であったかということを超えて，試行錯誤する自分自身を外側から見つめる視点を常に持ち続け，またその試行錯誤するという〈とり乱し〉こそ自分自身の「リブらしさ」として田中が重視しつづけてきたことにある。

1970年代のリブが取り上げた問題は，リブが運動としての大きなうねりを巻き起こしたことからも分かるように，当時最もラディカルな視点を持っていたと言えるだろうし，また現在の女性の問題に通じる課題でもある。しかし，その題材ひとつひとつに関しては，現代のフェミニズムによってより具体的に，また綿密に研究がなされていると思う。今，リブに立ち戻って検討したいのは，個々の女性がそれまで抱えてきた不安や痛み，個人的体験を政治的な問題として捉え直し，そこから自分自身の生き方を見つめる過程である。

1–3. 田中美津の〈とり乱し〉ウーマン・リブ論

1970年代の田中美津の主張は，当時リブ運動の最大の関心事であった「優生保護法改悪」問題の他，自分が関与してきた新左翼運動への批判，近代主義批判，連合赤軍連続リンチ殺人事件や運動体の共同生活についてなど多岐にわたるが，ここでは，田中自身がリブのエッセンスとして認識していたと思われる「性否定の意識構造」への批判と〈とり乱し〉についての発言を中心に整理したい。この二つは別々のことがらについて述べたものではなく，前者が「私たちの敵」を明らかにする作業であり，後者が実践を示すものとして位置づけられる。

①「性否定の意識構造」への批判

「性否定の意識構造」の打破は，田中美津が自分のリブ運動の新しさとして自認していたスローガンである。女たちが理由も分からぬままに反発を感じつつそれに従ってしまう「女らしくしなさい」という社会からの抑圧が，一体何のために存在しているのか，またこの抑圧に屈することが何を意味するのかという告発でもある［田中，1972＝2001：333］。

「性否定の意識構造」とは「性は汚い，罪悪な，口にすべきでない」ものとする意識構造のことをさし，「女と子供を男に依存させる経済構造」とセットになることによって，「女の経済的自立と女の性欲求を封じ込める」［田中，1972＝2001：336］とされる。

女たちが受ける「女らしくしなさい」という社会からの要請は，女の性の抑圧を通して「財産の保全と相続を目的とする経済体制」を維持するためなのだと田中は告発する。「性否定の意識構造」が女を〈バージンらしい〉=「女らしい」女に駆り立てる媒体として批判されるのが，女に対する「男の分離した意識」である。男にとって女に対する二つのイメージとは，一つは「母性のやさしさ」を象徴する「母」のイメージで，そのようなイメージに合致する女が結婚の対象とされる。もうひとつは，「性欲処理機」となる「便所」のイメージで，遊びの対象となる女たちのイメージで

ある。

> 男にとって女は母性のやさしさ＝母か，性欲処理機＝便所か，という二つのイメージに分かれる存在としてある。[田中，1972＝2001：338]

> 階級社会の人的基盤が一夫一婦制度としての女の性欲求を封じ込めることによって，すなわち，女の性を否定し，タブー化させることで成立していること。そして具体的には〈バージンらしさ〉を装わない女を便所として〈バージンらしい〉女より下に位置づけることによって，社会的な制裁を加え，女の性的欲求封じ込めは貫徹されてきた。[田中，1972＝2001：334]

女は「結婚の対象として見られ選択される」ために，「SEX に対し，見ざる，聞かざる，言わざるの清楚なカワイコちゃんとして」装い，「やさしさと自然な性欲を一体として持つ自らを裏切り抑圧していく」という［田中，1972＝2001：338］。

> しかし，所詮他人の目の中に見出そうとする自分とは，〈どこにもいない女〉であって，その〈どこにもいない女〉をあてにして，生身の〈ここにいる女〉の生きがいにしようとすれは，不安と焦燥の中で切り裂かれていくは必然［田中，1972＝2001：16］

> この惨めさを女の惨めさをも問いつめていくことであきらかにしていくことが，女の解放につながる道ならば，それはまずキミ自身の居直りから始まる。[田中，1972＝2001：340]

田中美津が「性否定の意識構造」への批判を通して行った主張とは，社会から要求され「女らしさ」というものが性へのタブー視に基づいて構成されているということ，またそのような「女らしさ」は男性の好みの女性像というような，一見個人的な感情を通して女性に要求されているという指摘である。性をタブー視し続ける「母」にふさわしい「女らしさ」を身に付けることは，「家」の存続のための「子産み機械」として女を閉じ込める。一方で，性的に奔放な生き方を選択することは，男性から「遊びの対象」として一段低い存在として扱われることになる。且つそのリスクを冒して，「母」なる「女らしさ」から逃れようとしても，性的な対象としての価値を男性に見出してもらおうとするならば，結局のところ「性欲処理機」として〈どこにもいない女〉を演じることで「性否定の意識構造」から逃れることはできないとされる。田中の中で，「本来の」女性の姿とは「やさしさ」と「SEX」の両方を持つ存在として位置づけられる。

②〈とり乱し〉

田中美津の〈とり乱し〉の基盤にあるのは，拭い去ろうとしても拭い去ることのできない自分に対する無能感である。

> (「女・子供」以上の評価を受けてこなかった)〈選ばれない女〉とは，己を問う「壁」を持ちえないでさまよう女，空転のしざまにおいて他に抜きんでてる女のこと。〈選ばれない女〉の一人であったあたしは〈自分は無価値だ〉という強い強迫観念といつも抜いたり抜かれたりしながら生きてきた。
>
> その強迫観念こそあたしのとり乱しの原点だった。[田中，1972＝2001：35–36] 括弧内は引用者。

田中にとって，その無能感とは女を無能だとすることで維持されてきた社会の産物としてあるわけで，自分の意識性に還元するべきものではない。

> (女性の就職や出世に関して，)〈女性の意識性の低さ〉がいくらリアルな現実であったとしても，それは，餌をくれるならどんな奴でも主人でございい，という風な卑しさを男とのかかわりの中で再生産してきた，そのような構造の中でしか女が生かされてこなかった歴史の結果としてそうなのであって，女の「生まれつき」などでは断じてない。だから，〈女の意識性の低さ〉を確たる前提にして，その女でも管理職になれるのに！と，笛吹けど踊らずの女たちをいくら歯がゆがっても，そんなの知らんもんねと背ける，あなたとあたしがいるんだ。[田中，1972＝2001：26] 括弧内は引用者。

植えつけられた無能感から，自己肯定する手段として社会から「女らしい」生きかた，男の評価に頼る生きかたが女たちに対して提示されてきたことを田中は指摘する。その上で，女の現実とかけ離れた〈どこにもいない女〉を「生ま身の女」に求める男の評価に合わ

せて生きることが，結局，女たちを切り裂いていくのだという。

> 無能なメスとして卑しめられている己れ，その「痛み」を「痛い」と感じる女がそんなバカなことがあるかと一方で思いつつも，ではどう生きるかの「では」のあとが続かないままに，曽野さんの言う「楽な道」（無能な者＝「妻として」，「母として」昔ながらに生きる道）選んだつもりが少しも楽でなくて，日々，生きてないというその実感は深くなるばかり……。［田中，1972＝2001：24］括弧内は引用者。

田中美津にとって，リブとは切り裂かれることなく自己肯定できる運動としてある［田中，1972＝2001：34］。

リブに出会う前の田中にとっては試行錯誤を繰り返して自己嫌悪に陥る〈とり乱し〉そのものも，嫌悪の対象であった。けれども，リブに出会って〈どこにもいない女〉から〈ここにいる女〉へと「本来の自分」を模索しようとしたとき，その出発点は「作られた自分」からしか始められないのだとしても，それにからめとられず生身の〈ここにいる女〉を表現するには〈とり乱し〉しかないと悟る［田中，1972＝2001：160］。

与えられたアイデンティティを拭い去った生身の〈ここにいる女〉とは，「存在そのもので，コレがそうだ，というしかないものがある」［田中，1972＝2001：160］。その〈ここにいる女〉である私は，〈どこにもいない女〉を演じてきた中で染み付いてきた嗜好性も，そのような生き方から解き放たれ自分自身の生き方を選択したい気持ちも，ごちゃまぜにあわせ持った矛盾した存在なのである。

田中がリブをもって自己肯定を図るとき，リブは〈とり乱し〉ながら〈ここにいる女〉，「本来の」自分を求めて模索する生き方の実践として認識されている。それゆえ，田中は〈無価値なあたし〉から「本来の」自分の模索を通して〈無価値じゃないあたし〉への転換を試み，またその模索の中に〈どこにもいない女〉になろうとする，男の価値観に自分を売り渡そうとする「媚」が潜んでいるのではないかと疑い，〈とり乱し〉ていく。田中にとって〈とり乱し〉は自己肯定と自己否定の繰り返しではあるが，まさにその繰り返しによって自己肯定を図っているのである。

さらに，田中のこの視点が運動に向けられるとき，運動内部において生じた個人の生活スタイルに対する教条的非難を，個々人の生き方の多様性を否定するものとして批判，抑制することができる。「本来の自分」の探求と，その過程において他者の価値観へ自分を売り渡してはいまいか，と問いぬくことは，表面的にどのようなライフスタイルを選択するかで，その人の意識を判断することを否定する。また，自分自身が〈とり乱し〉ながら生き方を選択しているという自覚が，他の個人がどのような生き方を選択しても彼女が自分の痛みに目をつぶっているのでない限り，その選択もまた〈とり乱し〉の一部として受容されるのである。

リブ運動においては，どのようなライフスタイルをとるべきかということや，自らの葛藤や不満を社会変革を通して解消する具体的な方法は，個々の運動体，あるいは運動に参加する個々人に任されていたといってよいかもしれない。そのような事柄が理論的に整理されていなかったからこそ，試行錯誤が重視され，とまどいや〈とり乱し〉こそが美徳にすらなりえたのではないだろうか。

2. 第二波以降のフェミニズムにおける〈とり乱し〉への応え

2–1. 抑圧構造の解明（1980年代）

「女性解放」を志向する社会の動きにおいて，1970年代から80年代にかけて大まかに主体の「活動家から研究者へ」の変化が見られると，江原氏は指摘する［江原，1990：5］。1975年の国際婦人年をきっかけとしてフェミニズムの議論に行政関係者の参入が始まると，フェミニズムの主張自体も社会的承認を得るようになる。そのような動きを背景として，「女性学」が誕生した［江原，1990：8］。しかし，研究者を主体とした「女性学」の誕生期においては，日本におけるリブ運動よりアメリカにおける第二波フェミニズムの紹介がなされる，といった具合に，日本のリブ運動の評価は否定的で，それとのつながりも薄かった［江原，1990：9–11］。

1980年代におけるフェミニズムの議論の特徴として，もうひとつ指摘されているのは，「有名人フェミニスト」の存在である［江原，1990］。彼女たちは，リブ運動がとったミニコミという媒体からマスコミを利用するという躍進を遂げ，且つ学問界に限定せず，それぞれの主張を個人として広く世間に発言するフェミニストたちである。彼女たちの登場は，フェミニズムの「メジャー化」をもたらし，学問界，マスメディ

アを巻き込んだ「フェミニズム論争」[4]を生み出したとされる［江原，1990］。

彼女たちの論争がリブ運動からの問題提起を受け継いでいるにしろ，研究者が「女性学」をリブと同様に自分の生き方と深く結びつけて認識しているにしろ，その主張が学問世界で通用する科学的な検証や精緻化された理論の裏づけを伴うことが当然化してくれば，無論その主張の際には試行錯誤は取り除かれ，スマートで分かりやすいものになっている。

リブの主張が性や身体の問題に切り込んだことは，フェミニズムの流れの中でも大きな分岐点となったことは前述の通りだが，性の問題に言及した1980年代の「有名人フェミニスト」の中に小倉千加子氏がいる。彼女は，強姦，夫婦関係，性教育などを取り上げながら，それまで「自然」・常識とされてきた，性や両性間関係にまつわる言説を，彼女の言う「性的奴隷制度」，男性が女性を支配するからくりを支えるものとして痛烈に批判した。氏の著作『セックス神話解体新書』［小倉，1988＝1995］において，日常的に耳にするような性あるいは男と女に関する言説が，どのような性差別意識をはらんでいるのかということが明らかにされるとき，押し付けられた「女らしさ」に苛立ち，あるいは「女らしさ」にはまり切ることのできない自分を責めていた者は，自分の苦しみを他の女性と共有することができる。もちろん彼女も「心理学者」という「研究者」だけれども，講演録をもとにした同書の性格上もあって学術的な頑なさはなく，著者の生々しい意気込みが伝わる点はリブの言説との共通点といってもよいだろう。

そんな小倉氏さえ，「女にとって恋愛と性は不可能な到達目標なのです」［小倉，1988＝1995：21］「世の中には，強姦されていることに気のついた女と，まだ気のつかない女とふたとおりの女しか存在しません」［小倉，1988＝1995：22］と言い放ち，そんな今の女性のおかれた状況の惨めさとそれに対する怒りを明らかにしつつ，うろたえを見せない落ち着きぶりなのだ。その文体が著者の生々しい言葉で書かれているからこそ，受けとめる側は同じ怒りを共有したその後で，はたとうろたえはじめるのだ。彼女が示したような性差別の抑圧状況から，いったい私たちはどのようにして抜け出すことが可能なのだろうか，と。

今ある自分のおかれた状況や痛みを構造的に解説され，かつ女性全体の問題として捉える視点が提起されても，またその上で日常的な認識枠組みが提示されても，それは受け手の生き方の選択になんらかの示唆を与えてはくれないかもしれないし，もし与えられたとしても，それにとまどう気持ちは問題化されていないのである。

2–2. 現在の〈とり乱し〉

本項では，まず1970年代ウーマン・リブ運動期以降の田中美津の発言も含め，改めて〈とり乱し〉を整理する。その上でリブ以降のフェミニズムにおいては，個々の女性の気持ちがどのように取り扱われ，またそれがリブにおける〈とり乱し〉の視点に比して，異なっているのはどのような点か明らかにする。

以下では，〈とり乱し〉を3段階に整理して，リブ以降のフェミニズムと絡めた考察の手がかりにしたい。

第一段階の〈とり乱し〉：リブに出会う前の，自分の「無力感」がどこから来るのか分からずに，抱えている不安。自分に対する無力感と自己否定感とを，リブへ参加していく基盤にもつ田中にとっては〈とり乱し〉も嫌悪の対象であった。

> リブに出会うまでの過程とは，あたしにとって「壁」をもたずに己を問い続けてきた過程であり，拡散に拡散を重ねていくとり乱しの過程としてあった。［田中，1972＝2001：35］

第二段階の〈とり乱し〉：自分の抱える「無力感」が社会からの「女らしくしなさい」という抑圧ゆえに生じていると理解した後の試行錯誤。男のイメージする「母」にも「性欲処理機」にもなりたくはないが，子どもを生み育てること，SEXすること，また男と暮らすことなどに魅力を感じる，そういう自分をも肯定したい，という〈とり乱し〉。「母」か「性欲処理機」のどちらかに徹するわけではなく，そのどちらもを主体的に選択する女性（「やさしさと，やさしさの肉体表現としてのSEXを合わせもつ総体としての女」［田中，1970＝2001：338］）を，「本来の」女性の姿，あるいは理想的な女性の姿と想定しつつ，その選択に，男の評価によって自己肯定しようとする「媚」が潜んでいるのではないか，という自分に対する疑いと不安を含む。

> 〈女のうらみ，つらみ〉という言葉には，理性的には否定できることが，嗜虐的な生きがいになってしまう，どうしようもない自分に対するいらだ

ち，やり場のない哀しみ，言葉にならない怨念が息づいている。［田中，1970＝2001：341］

（〈ここにいる女〉とは）〈お嫁に行けなくなる〉という古ぼけたすり切れたシッポを引きずりつつ，〈バージンらしさ〉に叛旗をひるがえすという矛盾に満ちた存在［田中，1970＝2001：334］括弧内は引用者。

第三段階の〈とり乱し〉：既存の女性イメージを否定し，あるがままの自分を探求し，また表現するには〈とり乱す〉ほかないとして，積極的に〈とり乱す〉。田中にとって〈とり乱し〉とは，矛盾を抱え込んだ存在としての自分を表現することである。また田中は，どのような生き方の選択をするにしろ，試行錯誤の過程を露呈する「みっともなさ」によって他の女たちと連帯しようとしていた［田中，1970＝2001：342］。

リブの中にも，解放された女性のあるべき姿として，結婚や化粧をしないことなど生き方やふるまいに関して特定の形式をよしとし，それ以外のものを批判する動きがなかったわけではない。田中は，そのような動きに対して，どのような生き方を選択するかではなく，その選択に際し「本来の」自分の選択を，他者の価値判断から自由な選択ができているのか，その追及に重きを置くことで，個人に対する批判をさらに批判した。この段階で〈とり乱し〉は，「本来の」自分を探求する試行錯誤として重視される［田中，1992：21–23］。

田中自身は，「『無価値なあたし』という脅迫観念［田中，1972＝2001：26］」を基盤として「ありのままに自分を受け入れる」ために，リブへと足を踏み入れていった。しかし，自分の行動や嗜好性（欲望）の中に他者の評価によって自己肯定したいという「媚」があるのではないか，と徹底的に問い，そもそも「ありのままの自分」とは何かを探し求めた。

その「ありのままの自分」の探求とは，女性を「無価値な存在」として，あるいは男に評価によって価値あるものになる存在として位置づける社会においては，「〈無価値なあたし〉と〈無価値じゃないあたし〉との，その追いかけごっこ［田中，1972＝2001：37］」という〈とり乱し〉を通してしか，なし得ない。〈とり乱し〉なくして「ありのままの自分」を探求し得ない女の置かれた状況を，そもそも「ありのままの自分」を問わずして自己肯定できてしまう男性へ見せつけ迫ること，それが田中美津にとって〈とり乱し〉を重視する理由のひとつだったのである。

リブ運動においては，とりわけ職場や法律の中だけでなく，生活の隅々において性差別が存在することが確認された。そのことは家族や恋人といった親しい人間関係における女性のあり方にも疑問を投げかける視点を生み出した。それらの私的関係の中で実践されてきた「愛情表現」が性差別の表れとして捉えられる一方で，愛情そのものは否定できないということが，性差別の抑圧構造にからめとられることなく，親しい人間，とりわけ男性とどのような関わり方をしていけばよいのか，という混乱を女性たちにもたらしたと言える。リブ運動の中で選択的にシングルマザーになることが肯定され，その流れの中，敢えて結婚を決意する運動家もあり，それに対する批判がまた批判され，という状況があったことは，その混乱を示している。現在においても，好意を持つ男性から好かれたい，結婚したいと望みつつ，その男性の理想の女性像や結婚に際して男性の家族の望む妻像に自分を変えたくはないという気持ちを矛盾した欲求を持つものとして葛藤する女性はいるだろう。

これに対し，90年代における感情社会学のアプローチでは，愛情という感情は「コミュニケーションとしての愛情」と「記号としての愛情」に整理される［山田，1994］。異性との関わりや子育てを通して得る感情を肯定してそれを求めることが，社会から「愛情があるならば行うはずだ」とされている行動をとることとは別に説明されることによって，リブにおける〈とり乱し〉に部分的にではあるが応えている。

また，『ジェンダー秩序』［江原，2001］の中では，女性の生き方や「ふるまい」の選択が女性の意識を問題にすることなく説明されている。女性の「ふるまい」は男性だけでなく同性である女性の視線も影響しているのであり，その選択は「誰かに気に入られたい」という「媚」というよりは，どのような「ふるまい」が自分の「権力」を行使する上で有利かという冷静な判断に基づくものである，という。このような理論は，女性を責めない。女性が社会から期待される「女らしい」女として生きることは，その女性の無知や無力を意味しないのである。少なくとも，女性に劣等感や無力感を与えることにフェミニズムが加担することは避けられる。

しかし，「今の私」がすっきりと説明されても，「女に対する抑圧」の中に形作られた自分に目をつぶるわけにはいかないのであって，具体的な形をもたない

「あるがままの自分」を追い求めてさまよう「私」は，その〈とり乱し〉の整理を繰り返しても，試行錯誤や葛藤を繰り返していくのではないか。

現在の女性たちの〈とり乱し〉をめぐる状況とは以下のように言えないだろうか。フェミニズムの言説に出会って，自分の抱えてきた痛みや不安あるいは疑問に理論的な説明を得ることができ，あるいは自分が抑圧されているということ自体に気付く。そのことは，自分自身を責める状況から女たちを救い出してくれるだろう。だけれども，そのような状況に自分をおいやった構造からどうやって脱皮していったらよいのか，生き方としてフェミニズムを選択するにはどうしたらよいのか，そのような疑問もまた自分の抑圧状況を自覚したとき必然的に沸きあがることだろう。それの答えになりそうな，理想の女性像を示す言説やあるいは生活モデルは，フェミニズム言説の中に限らず，様々な生活の場で女性たちに提示される。けれども，それらは兎にも角にも今までの自分ではないのであって，様々な生活モデルや女性像の間を，あるいはそれを正当付ける理論の間を試行錯誤しながら，「本来の」自分，あるいは「いごこちのよい自分」を求めていくしかない。

1990年代以降のフェミニズムが理論化を通して応えた個々人の気持ちとは，自分の抑圧状況に気付くまでの葛藤と，また気付いても生き方を変えることのできない女性の開き直りについてである。現在において，スマートな生き方もできず，立派な理論も持たない〈ダメ女〉が〈とり乱し〉て「本来の」自分を探求したいとき，そのような女性の試行錯誤を，リブ以降のフェミニズムの中に見出すことができるだろうか。自分の不安や痛みと向き合ったときの葛藤やとまどい，リブ以降フェミニズムにおいて取り扱われたのは，そのような個人の気持ちであって，少なくともそれらを葛藤のまま試行錯誤のまま露呈しようとする〈とり乱し〉が肯定されたわけではなかったと言えよう。

とすれば，現在における〈とり乱し〉は，女性の抑圧状況と葛藤の整理を繰り返すフェミニズムの理論と自分の痛みや葛藤をどのように結びつけるのか，それを考えていく際（個人体験の政治化過程）の試行錯誤と，自分の生き方を模索する上での試行錯誤だけとは言えない。このような試行錯誤に触れられることのないフェミニズム理論によって自分の痛みを「女」の問題として捉え直していくことは，その個人体験の政治化やその後の生き方の選択をスマートにこなさなければならないという抑圧を取り除くことにはならないからだ。このような抑圧との葛藤も，現在の〈とり乱し〉のひとつと言えるだろう。

強烈に自己肯定を望みつつ，「今の私」を「ありのままの自分」であるか「ニセの人格」であるか問い続けるリブの〈とり乱し〉は，「今の私」に安住することを許してはくれないかもしれない。しかし，少なくとも，何が「ありのままの自分」なのかを問うていく過程と迷いが肯定されているのである。

3．現在のフェミニズムがリブから学ぶもの

本章では，まずフェミニズムへのバックラッシュに対するフェミニズム側からの応えを手がかりに，現在のフェミニズムにおけるウーマン・リブの評価を整理する。その評価と本論におけるウーマン・リブとりわけ田中美津の主張における〈とり乱し〉の評価を照らし合わせ，これからのフェミニズムの方向性に一視点を示したい。第2項では，葛藤や試行錯誤の露呈としての〈とり乱し〉はリブ以降のフェミニズムでは肯定されてこなかったという認識に立ち，なぜ〈とり乱し〉がフェミニズムの中でリブを語る場合を除いて触れられることなく現在にいたるのか，を探りたい。

3–1．現在におけるリブ評価

現在において，フェミニズムに対しとりわけ現在の若い世代が反発を感じている，あるいは無関心である状況に関して，フェミニズムの持つイメージについての議論がなされている。その中で，伊藤公雄氏は「フェミニズム」という言葉そのものに嫌悪感を示す若者が存在することを指摘し，その嫌悪感の原因を言説のレベルと現在の若い世代の意識のレベルから，以下のように説明する。

一つには「正しいけれど届かない」という議論の「単調さ」，そして「他者への配慮のない」「当事者性」，さらに「告発者」を客観化して押しつぶす理論の「高級化」の3つがあるとされる。それらの要因のうち，理論の「高級化」は運動と切り離されたフェミニズムの特徴として，「単調さ」，「当事者性」の強調は，リブ運動およびそれに深い影響を受けたフェミニズムの特徴として捉えられていると言えよう［伊藤，2000：58–59］。

しかし，リブ運動におけるフェミニム言説は「単調」で，その主張の正しさゆえに受け手へと届かない，というものだったのだろうか。むしろ，1980年

代以降の「女だってがんばればできる」という「ガンバリズム」[江原，2000：12–30] こそ，「できる女」が目に見える情報化社会にあって，それでも「できない女」に「正しいけれど受け入れがたい」主張であったのではないか。少なくとも田中においては，本論で見てきたように，個人経験の語りを具体的な改革案を提示せぬままに吐き出し，それでいて自らの発言を〈とり乱し〉として客観的にとらえる視点があった。このような主張は，分かりやすくもなく，「共感できるかどうか」はあっても「正しいかどうか」は判別しにくいものと言える。

リブの主張が「単調な男社会批判」の繰り返しというイメージを与え受け手に届かなかったとすれば，それは自分の問題を「女」の問題として語るというリブの戦術が，リブの語る「女」としての経験を持たない男性と，そもそも同じ立場で語ることを拒否していたからではないか。またリブの「女」としての語りは，個々の女性の経験が「女」でありさえすれば共有できる経験であるかのような幻想に基づいていることは否定できない。個々の女性が抱える不安や痛みが「女」であるがゆえに抱くものであるということと，それが「女」でありさえすれば皆が経験するものであるということは別である。「女」としての語りは，その点が曖昧にされることで女性の多様な立場と痛みを表現しきれていなかったのではないか。そうだとすれば，リブとして目に見える主張が，結局特定の女性の経験に偏り，それゆえの「単調さ」を持っていたと言い換えることができるだろう。

伊藤氏によって指摘されるフェミニズムへのバックラッシュへとつながる，もうひとつの要因は，言説の受け手である若い世代の意識の変化である。氏によれば，社会の情報化によって無限に広がったかのように見える可能性の増大が，逆に「私」にとって「恐怖」となり「社会」的なるものからの引きこもりを生じさせているという [伊藤，2000：60]。

「社会」に対する無関心さが増大している状況において，「個人的な問題は政治的な問題」であるとするフェミニズムの説得力は精彩を欠くことになる。個人経験の政治化という過程は，自分の経験や抱える問題を社会とのかかわりの中で捉えなおすということを意味するが，そのことは当然ながら，個々人の抱える葛藤や痛みの解消は社会の側の変革を必要とするということも，また意味する。これらは，直接的にしろ間接的にしろ他者の変化を要求することにつながってゆくがゆえに，「社会」に関わりたくない，「他者を傷つけたくない」という意識の中で，受け入れがたいものとなっているのだろう。

とりわけ「当事者性」が強調されるフェミニズム言説においては，社会変革の必要性を求めるに至るそもそもの問題関心は「私」や「女」から始まる。もちろん，「私」だけの問題ではないという認識を持つからこそ社会変革が要求されるのだが，「社会」と関わらずにいることをよしとする意識からすると，その「当事者性」の強調は「身勝手な主張」として受けとめられるのかもしれない [伊藤，2000：60]。

しかし，ウーマン・リブ運動において個人経験を政治化する過程が，重要な部分を占めていたことは確かだが，個人の問題より社会改革を優先させていたという解釈は，必ずしもあてはまらない。例えば「産む」ことの価値をリブが結局のところ捨てきれず，シングルマザーや共同体による育児といった従来の「母」とは異なるあり方を模索しようとしたのも，個々の女性の気持ちが重視されたからである。このような彼女たちの行動は，むしろリブ以降のフェミニズムによって，「育児は女の領域」という「性別役割分業」を支えることに加担する，すなわち「社会変革」を妨げるという批判をうけた程である。

さらに〈とり乱し〉とフェミニズム離れの要因に関して言うならば，リブ運動はその主張を「女」の語りとして展開してきたが，その「女」として語る，ということ（およびそれが持つ危険性）と〈とり乱し〉は必ずしも不可分の関係にあるわけではない。確かに，リブ運動において田中美津が〈とり乱し〉について行ってきた主張は，〈ここにいる女〉，〈生身の女〉と言った具合に「女」という言葉に彩られてはいる。にもかかわらず〈とり乱し〉によって希求されるのは，〈あるがままの自分〉なのである。田中美津は，どのような意味においても，既存の女性イメージにとらわれることを嫌った。たとえ，そのイメージがリブから生まれた女性イメージだとしても，である。その田中の言う〈とり乱し〉において，〈とり乱し〉によって求められるものが〈ここにいる女〉と表現されようと，それは自分にとっての「女」なのであり，全ての女性と共有できる「女性性」を求めてのことではなかったと考えることができる。〈とり乱し〉て求められる個々の女性の生き方は必ずしも「女」の生き方として求められるわけではない。むしろ，誰でもない「私」の生き方が模索されるからこそ〈とり乱し〉が生じるのである。

3–2. リブとリブ以降のフェミニズムの断絶

1970年代から80年代にかけて，フェミニズムの担い手が大まかに「活動家」から「研究者」への変化がみられると，学問としてのフェミニズム，「女性学」によってリブ運動はむしろ否定的な評価を受けた。フェミニズムの新しい担い手がリブ運動を否定的に評価し，あるいは敢えて触れないことで暗に自分の研究や主張との関連を否定しようとした[5]とすれば，その理由のひとつはマスコミによってつくられたリブ運動のイメージであると思う。リブに与えられたマイナスイメージを引き継がないために，新たな「女性解放」へのアプローチを模索する「女性学」の担い手がリブとの連続性を暗に否定したことも十分に考えられる。

しかし，それだけではないだろう。リブ運動がひとまとまりの組織によって担われていたのではなく，小規模の運動体による活動の総称であり，その主張は多様で一貫したものではなかったことは先に述べた。リブ運動において，性差別の要因として様々なイデオロギーや制度[6]を批判する視点は，むしろリブ以降の「フェミニズム論争」に引き継がれていると言ってよい。とすれば，リブから「女性学」へと引き継がれなかったのは，そのような性差別社会を批判する視点というより，運動において主張を展開していく，そのあり方であると考えられる。

中でも，本論で取り上げている〈とり乱し〉，試行錯誤の露呈を積極的に評価し実践の根幹にすえる，そのような主張のあり方が引き継がれてこなかったのは，1980年代以降の「女性学」の目指す何と反するものだったからなのだろう。

リブ運動における〈とり乱し〉とは，〈あるがままの私〉の生き方を模索する上で生じる葛藤や試行錯誤を，整理のつかないまま露呈し，そのことによって女性の抑圧状況を表現しようとする試みである。それはあくまで個々の女性がそれぞれの〈あるがままの私〉を模索する中で為されるものである。その為，当然にも〈とり乱し〉を重視する視点からは，抑圧状況にない女性のあり方を具体的に提示し，その生き方の実現のために必要な政治的課題を提起するには至らなかった。個々の女性の経験を重視するということが，運動を展開していくうえで具体的な行動計画を持つことを困難になってしまうということである［江原，1985：133］。

また，〈あるがままの私〉を模索していく過程をあえて論理的に整理せぬまま表現しようとする〈とり乱し〉は，既存の学問や法制度をリブ的な視点で問い直そうとするとき，学問の側への説得力を欠くものとなる。1980年代の「女性学」は，リブ運動の行ってきた性差別社会への批判を分かる人にしか分からないリブの言葉ではなく，その言葉を「からかい」の対象としていた人たちをも納得させる言葉で展開しようとしたのである。〈とり乱し〉で相手を仰天，混乱させることで問題を提起するのではなく，理論で説得・納得させることで「女性学」は問題を提起した。〈とり乱し〉，情けない自分をさらけ出して自分と同じ状況にある女性と連帯するのではなく，自分の置かれた状況を分かりやすく整理することで，同じ状況にある女性たちの理解と共感を図ったのである。

4. おわりに——現在における〈とり乱し〉有効性と限界

田中美津は1990年代に入り，リブとそれ以降のフェミニズムの違いについて次のように述べている。

> （女たちは，）母としてとか，妻としてとか，私たちにとって気持ちのよくない，無理のある，そういうケダモノを演じなきゃならなかった。それに対して，リブはそういう役割は嫌だと蹴ったけれど，ケダモノの部分そのものを全部捨てた訳ではなかったというのがフェミニズムと違うところだと思う。［田中，1992：18］カッコ内引用者。

> フェミニズムはそうではなくって，女の人間指数をひたすら高める方向を目指すことによって，体臭とか，アカとか，カサブタとかをひっくるめた生きものとしての存在のリアリティーを感じさせないものになっちゃってる。［田中，1992：19］

田中美津が，「女らしさ」を否定しつつ，〈あるがままの自分〉を言葉で表現しようとするとき，そこでは否定される「女らしさ」を表現する言葉が用いられ，しかも具体的に今の「私」と何が違うのかが明示されるわけではない。今感じている痛みを「女」であるがゆえに受ける抑圧から捉えるとき，そのリアルな痛みは「自分」を「女であること」に深く結びつける。その「女であること」と押し付けられた「女らしさ」とが田中の中でも明確に分離して整理されているわけではないのだ。それゆえに田中は〈とり乱し〉ていくのだが，その〈とり乱し〉もまた「ケダモノ」性として

「女らしさ」に位置づけられ，リブ以降のフェミニズムがそれを失ったものとして批判されている。

この田中の〈とり乱し〉に関して，葛藤や試行錯誤を生じさせている，性や「女らしさ」に関する概念の混乱はそれ以降のフェミニズムによって，ある程度整理されてきたということは，本論第2章で見てきた通りである。また，女性が自分の痛みを個人的な問題と考えがちであったり，あるいはそれを「女」の問題と認識しえても行動やふるまいを変革することができなかったりする要因は説明がされてきたことも同章で示した。今後も，女性が葛藤状況にさらされる状況は，変化とその時代ごとの説明が繰り返されていくのかもしれない。

このような発展を遂げてきたフェミニズムがリブから学ぶものがあるとすれば，それは現在の女性をとりまくどのような状況と関わりがあるのだろうか。現在の女性をとりまく状況を考えるに，ひとつにフェミニズムの功績もあって女性の生き方，あるいは女性の生き方に関する考え方が多様化し，社会の情報化がさらにそれを可視化していることが指摘できる。「女性学」，「ジェンダー論」といった「女性解放」に関わる科目は，今や351大学で開講され（1996現在）[7]，多くの女性がフェミニズム理論に触れる機会が生じているし，大学以前の中高生に関しても，「男女平等教育」を推進するネットワークが広がりつつあるという［堀内かおる，1999：146］。

一方でバブルの崩壊という経済状況によって，女性の就労は非正規雇用の形が増大し［服部良子，1999：90–91］，経済的自立を可能にする就労形態を若い女性が展望するには厳しい状況になっていると言える。また，家庭における女性役割への期待は，高齢化・少子化の波によって，イエの存続というより，社会の存続をかけて高まっているかにも見える[8]。

若い女性をとりまく状況は，「男女平等」な生き方をよしとすることが当たり前とされ，様々な生き方をオプションとして提示されることによって，その「男女平等」な生き方が可能であるかのような幻想を見せられている点でリブ運動の1970年代とは異なる。リブ運動の時代にも，労働者として「エリート女性」となることで解放されるという幻想があったかもしれないが，現在は多様な生き方を選択できるという幻想なのだ。様々なオプションを提示されているがゆえに，暗黙に期待される以外の生き方を選択できないことは，自分の努力不足，能力不足の結果と思い込まされてしまう。

1970年代と比べ，女性たちがフェミニズム理論に触れる機会は格段に増え，それまで自分が抱えてきた痛みや不安を「女」の問題として捉えなおす機会もそれと同様に増加していると言えよう。さらに，社会の情報化によって多様なライフスタイルが提示される現在においては70年代よりさらに，女性たちは生き方の選択に際してとまどわずにはいられない。その不安や葛藤を正面から見つめ，期待される「女性役割」ではない自分自身の解放された生き方を模索するということが，以前にも増して不安，葛藤や試行錯誤を引き起こすのだから，その不安や葛藤をそのまま露呈することを今だからこそ肯定したい。

とはいえ，〈とり乱し〉の有効性について考えてみるにあたって，改めて認識しておかなければならないことは，女性がフェミニズムや「女性解放」を志向する理論に出会うことが，すなわち〈とり乱し〉を生じさせるというわけではないということだ。〈とり乱し〉は，自分の抱える問題を「女」の問題として捉えるとともに，自分の生き方の問題として〈あるがままの私〉を模索するがゆえに生じることである。例え今の生き方に抑圧を感じていたのだとしても，自分自身が選択した生き方であるかが徹底的に問われる中にこそ〈とり乱し〉はある。女性を抑圧する制度に絡めとられる従来の女性役割を拒否することは，〈あるがままの私〉の探求における，その指針のようなものでしかない。

社会的に承認される女性イメージが固定的で，女性の多様性がそれほど可視化されていなかった1970年代において，自分の生き方を常に〈あるがままの私〉か，「本来の」自分か，と問い続けることは，次なる理想の女像を創出してしまわないためにも，必要な作業であったと思う。しかし，むしろ生き方の多様性が女性を混乱させるほどに広がり，また「個人的なことは個人的なこと」という他者へ関わることへの無関心さが蔓延していると言われる現在において，性差別の抑圧から解放された「理想の女像」が提示されることは，むしろ困難な状況と言える。そのような現在において，自分の「生き方」をそれが「本来の」自分の選択に基づくものか，これが本当に〈あるがままの私〉かと問い続けることは，どのような意味を持つだろうか。〈とり乱し〉の重視は，それがまた〈あるがままの私〉を問い続けるということを理想的な生き方として提示してしまう危険性を持っているとも言える。

性差別から完全に自由な生き方が存在するのかという疑問にぶつかるとき，それでも永遠に〈あるがまま

の私〉を追い求める〈とり乱し〉の重視は，その限界性をあらわにする。現在において女性の多様なライフスタイルが可視化したということは，女性に対する性差別の抑圧を様々な形ではねのける生き方が提示されているとも言える。そのことで，どのような形で性差別に抗おうとも，性差別の抑圧と全く無関係に生きることは不可能であり，性差別の抑圧を受ける「私」，それから解放されたい「私」や性差別とたたかう「私」はあっても，性差別を受ける前の「私」なるものは存在しえないということもまた，現在の女性たちの知り得るところとなった。

女性が性差別の抑圧から解放されたいと願うとき，自分の痛みを表す言葉を模索し，その痛みから解放される生き方を模索する試行錯誤は肯定されてしかるべきではある。けれども，葛藤や不安の露呈や試行錯誤は，もはや〈あるがままの私〉を模索しつづける過程として肯定されるのではない。現在の〈とり乱し〉は，個々の女性がよりよいと感じる，また別の「作られた自分」を選択し，それが「作られた」ものであること，性差別の抑圧構造の中でどのように位置づけられているのかを自覚しながら生きていく，そのような生き方を〈とり乱し〉の先におくものかもしれない。

今，試行錯誤し続けることを重視するリブの文脈を含んだ〈とり乱し〉という言葉を離れて，私たち女性が自分の生き方を模索すること，その上で試行錯誤や葛藤を露呈してしまうことを積極的に肯定する，そのようなフェミニズムのあり方はどのようにして可能か，そのようなフェミニズム研究を今後の課題としたい。

注

1）本論で取り上げる田中美津のリブ運動における主張のなかで，女性自身が女性にとって抑圧的な関係を男性との間に作ろうとする欲望は，それまで女性が期待される「女らしさ」を演じて生きてきた中で染み付いてしまった嗜好性として説明される。

2）その代表としては，「国際婦人年をきっかけとして行動を起こす女たちの会」を挙げることができる。雇用における性差別を禁止する具体的な法律の設置や，男女差のある家庭科教育の見直しなど，具体的な目標を掲げて運動を展開したという他に，国際婦人年をきっかけとし，国際社会における日本の「遅れ」として，性差別解消の必要性を主張しえたことも運動が正当性を持ちえた要因のひとつと思う。

3）江原氏に，その代表者として挙げられているのは，上野千鶴子氏・宮迫千鶴氏・落合恵子氏・小倉千加子・落合恵美子氏・青木やよい氏等［江原，1990：12］。江原氏自身もその一人と言えるだろう。

4）1980年代における「フェミニズム論争」としては「エコ・フェミ論争」，「総撤退論争」，「アグネス論争」など。［江原，1990：11］

5）江原氏によって言及されているのは『女性学入門』［1979，サイマル出版会］を著した富士谷あつ子氏や，『女性学ことはじめ』［1979，講談社］の岩男寿美子氏［江原，1990：9–10］。

6）本論で取り上げた「性否定の意識構造」，「母性幻想」の他，近代主義，産業主義への批判。それに対応する制度，イエ制度や効率優先の産業社会への批判など。

7）全国の大学・短期大学の28.4%に相当。堀内かおる，1999「女性のエンパワーメントのための学習」『女性のデータブック第3版』井上輝子・江原由美子／編，有斐閣から。

8）高齢化に伴って高齢者の介護期間は延び，もはや専門知識・技術なしには介護できないほどに高齢者の要介護状態が深刻になってきた。そのことで介護の社会化は必然となったが，とは言え景気低迷に伴う福祉政策の施設重視から在宅重視への転換は，介護の作業が外部化されてもその責任を家庭に女性に期待させることにもなるだろう。少子化が女性の「産む性」としての側面を強調させるに足る現象であることは言うまでもない。

参考文献

田中美津，「エロス解放宣言」（1970），『資料日本ウーマンリブ史 vol. Ⅰ』，松香堂，1992
———，「反論を待つために！」（1970），同書
———，「女性解放への個人的視点」（1970），同書
———，1972＝2001『いのちの女たちへ　とり乱しウーマン・リブ論』（新装版），パンドラ
———・上野千鶴子，1987『美津と千鶴子のこんとんとんからり』木犀社
江原由美子，1985『女性解放という思想』，勁草書房
———，1990「フェミニズムの70年代と80年代」，『フェミニズム論争』，勁草書房，
———，2000『フェミニズムのパラドックス』，勁草書房，
———，2000，「対談　浸透したがゆえの伝わらなさ－ガンバリズムからコントロールできないものの価値へ」『インパクション117号』
———，2001『ジェンダー秩序』，勁草書房
上野千鶴子，1986『女は世界を救えるか』勁草書房
山田昌弘，1994『近代家族のゆくえ』，新曜社
伊藤公雄，2001「『相対化』と『私』中心社会の中で」，『インパクション117号』インパクト出版会
角田由紀子，1991『性の法律学』，ゆうひかく選書
小倉千加子，1988＝1995『セックス神話解体新書』，筑摩書房
ジーン・マックウェラー，1975『レイプ－異常社会の研究』現代史出版会
松浦理恵子，1992＝1995「嘲笑せよ，強姦者は女を侮辱できない－レイプ再考－」『日本のフェミニズム6　セクシュアリティ』，井上輝子・上野千鶴子・江原由美子

／編，岩波書店
堀内かおる，1999「教室をジェンダーフリーに」『女性のデータブック第3版』有斐閣
秋山登代子，1999「乖離する建前と本音」「四半世紀で多数派になった『過程と仕事の両立』の意識」『女性のデータブック第3版』有斐閣
服部良子，1999「女性化進む労働力」『女性のデータブック第3版』有斐閣
『インパクション73　特集　リブ20年』，インパクト出版会，1992
落合恵美子，1985「〈近代家族〉の誕生と終焉」『現代思想6月号』